総合医学会報告

シンポジウム：「学生が望む学習者支援」

看護学校卒業生と助産学生の2つの立場から学習者として成長できるための支援

五十嵐和美

第62回国立病院総合医学会
（平成20年11月12日　於東京）

IRYO　Vol. 63　No. 10（645－648）2009

要旨　看護学校では看護の基礎を学ぶだけでなく，専門職業人となるための支援が必要である．また，助産学校では短い期間のなかで，多くの知識だけでなく技術も習得しなければならないため，効率よく学ぶことができる支援が必要である．看護学校，助産学校ともに共通していえることは，学生は限られた学習期間のなかで，多くのことを学び成長したいと考えていることである．だからこそ，学ぶ機会を最大限提供してほしいと考える．看護学生および助産学生の体験から，ソフト面に焦点をあてると看護学校に期待する学習者支援は，1）学習方法を転換できるための支援，2）「調べる」ことと「学ぶ」ことを関連させるための支援，3）自分自身の看護実践を評価できるための支援，4）社会性を身に付けるための支援である．助産学校に期待する学習者支援は，1）学習の振り返りができるための支援，2）技術を獲得するための支援である．学生には個人差がある．支援する側で，学生はここまでできればよいと基準を決めるのではなく，個々の持つ力を把握し，さらに一段階上の学習ができるような支援を学習者は期待している．

キーワード　学習者支援，看護学生，助産学生

はじめに

看護学校は看護学の基礎を学ぶと同時に，学ぶ姿勢や学習方法，社会性など多くのことも学ぶ場である．助産学校は，1年間という短い期間のなかで，看護学校よりさらに専門性を追求することが求められるため，学習者個々の学ぶ姿勢がさらに重要となる．看護学生および助産学生の経験をもとに，看護学校と助産学校に期待する学習者支援について，ソフト面から述べる．

看護学校に期待する学習者支援

1．学習方法を転換できるための支援

看護学校に入学する学生は，看護師になるという強い目標を持って入学する．その学生のほとんどは青年期にあり心理的に成熟過程にある．成熟のプロセスには多くの次元があり，それぞれの次元で独自の発達サイクルを持っているといわれている．青年期にある学生は依存性から自立性へ，受動性から能動性へ，表面的な関心から深い関心へなどの成熟過

元　国立病院機構東京医療センター附属東が丘看護助産学校　助産学科（現　沖縄赤十字病院）
（平成21年3月9日受付，平成21年10月16日受理）
Support to be able to Grow up as a Learner from Two Situations of a Nursing School Graduate and the Midwifery Student
Kazumi Igarashi, Higashigaoka School of Nursing and Midwifery NHO Tokyo Medical Center (present : Okinawa Red Cross Hospital)
Key Words : learner support, nursing student, midwifery student

程にある．ノールズは学習者の特性を体系化し，「人間は成熟するにつれて，学習への方向付けは教科書中心的なものから課題達成中心的なものへと変化していく」[1]としている．ペタゴジーからアンドラゴジーへと変化する時期は，中等教育までの学習者自身の学ぶ姿勢や学習方法の違いに気づき，学ぶ姿勢と学習方法の転換を求められることに戸惑うことが考えられる．看護学校では，成熟過程において学習方法が変化する時期と，自律した専門職業人となるために，学ぶ姿勢や学習方法を転換させることを求められる時期が重なっていることで戸惑いがある．臨地実習においては，それまで経験したことのない実習指導者や患者との関係で極度の緊張状態にある．学生にとって負の体験が続けば，看護師という目標自体も揺らぎ始める．そうならないために，学生は実習の中で患者の反応をとらえ，学生自身が十分考える機会を持ち，学ぶ姿勢と学習方法を転換しやすい支援を求めている．学習方法を転換できるための支援として3点ある．

①教科書中心の講義ではなく，講師の経験をもとに，臨床での具体例を講義の中で織り交ぜ，理論と実践が繋(つな)がる講義．

②学生の緊張緩和のために学生の看護に対する思いを聞く機会を設け，学生が気づいていないプラスの評価を提示し，学生のモチベーションを維持できる支援．

③「学生」を集団としてとらえるのではなく，個性を尊重し，個々の力を引き出す関わり．

2．「調べる」ことと「学ぶ」ことを関連させるための支援

看護学校で学ぶとは，基礎的な知識を身に付け，さらに「なぜ？どうして？」という疑問を持ち，わからないことは自分で調べ，根拠を明らかにしていくことである．この調べる過程こそが自律した専門職業人になるために重要であり，もし，調べても答えが間違っていたり，見つけられなかったとしても，調べた過程が学生にとっては学びとなる．また，自分で調べて得た知識は自分のものとなる．しかし，学生では知識が不十分なこともあり，疑問を持つ視野が狭く，浅い．だからこそ，教員や実習指導者に問いかけられることで，学生は知識を蓄積することができるようになる．さらに，学生自身の疑問の視野も徐々に広く深いものとなる．そのため，「調べる」ことと「学ぶ」ことを関連させるための支援として，教員・実習指導者の持っている，広く深い疑問の視点で，質問を投げかけられる，つまり学生が気づかない視点に気づく機会の提供が必要である．

3．自分自身の看護実践を評価できるための支援

学生が考える「実習指導者が怖い」，「優しい」とはどういったことを指しているのだろうか．何も問いかけらないまま，学生が考えたとおりの援助を実施できることを「優しい」というか，これは，誤っている．「怖い実習指導者」といわれる実習指導者の中には，問いかけが多い実習指導者が含まれる．学生に対し多くの問いかけをしてくれる熱心な実習指導者は一見「怖い実習指導者」とされる．これは，実習指導者と学生の価値観の違いも関係していると考える．多くの問いかけで，学生に考えさせる機会を与え，学習したことを評価してくれる実習指導者こそが，学生にとって「本当に優しい実習指導者」である．このような熱心な実習指導者は臨床で働く際に自律した看護師になれるよう，先を見据えて指導している．学生が自分自身で，看護実践を評価できるための支援として，2点ある．

①学生の考えや技術が，妥当であるかどうかの判断と学生への提示．

②学生の考えや技術に対し，学生が自ら改善すべき点を見出せるための機会の提供．

4．社会性を身に付けるための支援

現代の若者気質として対人関係の弱さや特定の人間の輪から離れられないなどの指摘もある．また，新卒看護者に対し社会人としてのマナー不足など，社会的スキルの欠如を多くの人が指摘している．本来なら，社会人として必要な常識や対応の仕方は最低限，身に付けて入学すべきであるが，実際は身に付いていないのが現状である．これらは，家庭生活の影響を強く受けるため社会人としてのマナー不足に気づかないことも多い．学生は，臨地実習を通して患者と家族，医療スタッフと関わる機会を持つ．この機会に社会人としての態度や社会性を習得しやすい環境にある．このような教育環境を最大限に生かし，臨地実習の機会に，社会性を身に付ける支援が必要である．そのための支援として4点ある．

①実習開始前に，人として看護者として，身に付けるべき対応の仕方について集中的に指導を受ける機会の提供．

②学生の言葉遣いや所作振る舞いに違和感があると

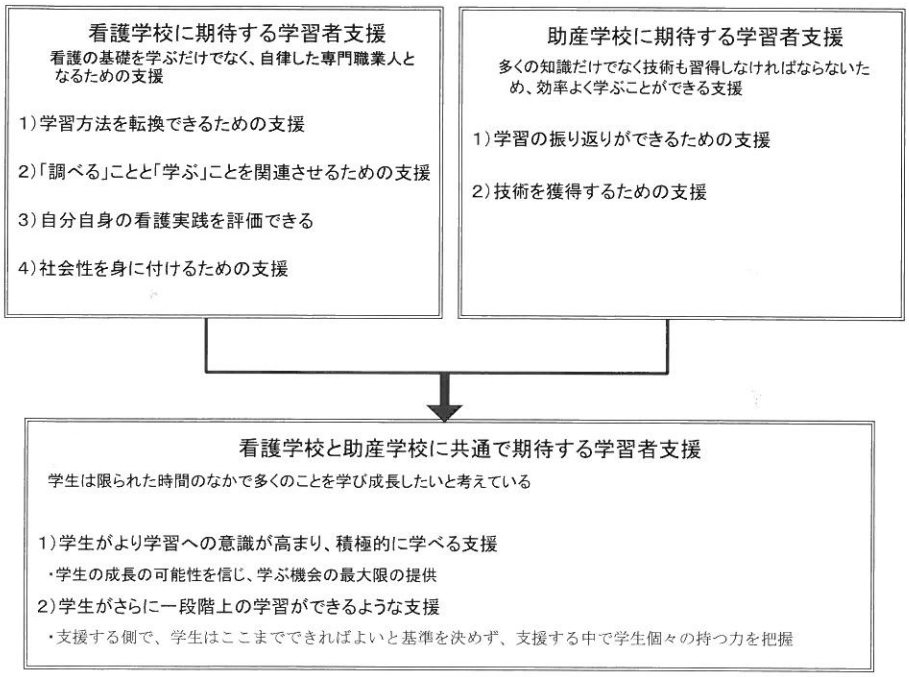

図1　期待する学習者支援

きには，その都度，きちんと理由も含めた指摘．

③学生個々が自ら積極的に臨床看護師に質問や相談を行い，細かいことでも悩んだときには指導を受けられる体制の整備．

④実習指導者以外の医療スタッフと関わる機会の設定．

助産学校に期待する学習者支援

1．学習の振り返りができるための支援

助産学校における1年間の教育課程では，講義形式の授業だけではなく，技術の獲得や研究，グループワークに多くの時間を費やす．さらに，正常分娩10件の直接介助を経験するために実習に費やす時間が圧倒的に多くなる．そのため，講義を振り返る時間も確保できない状況で実習に行くこととなり，これは不安が大きい．このため，振り返る時間を確保できるための，カリキュラムの調整も必要である．

2．技術を獲得するための支援

助産学校での技術練習の際，看護においても同様ではあるが，助産ではとくにイメージすることが重要である．分娩介助の技術練習では，繰り返しの練習も必要だが，練習できる時間にも限度がある．そこで重要なのは，手技の根拠を考えたうえで，イメージトレーニングすることである．助産学科では分娩介助の技術デモンストレーション見学後で実習開始前に，病棟で分娩見学が行われている．分娩の際，産婦がどのような状態であるか，また産婦に対し助産師がどのような声かけや援助を行っているか，助産師の視点で分娩見学をすることでイメージトレーニングを行いやすくなる効果がある．分娩介助の技術練習を開始した後であるからこそ助産師の視点で見学することができ，分娩介助のイメージがわき練習もスムーズにできるようになる．しかし，医療の近代化が進んでも，なお助産技術には触覚に頼る技術が多い側面があるといわれており，手指の位置や感覚など細かい部分については，繰り返しの見学や実践が必要となる．とくに，内診という技術では，内診指がどのような動きをしているのかは外見上わかりにくい．外から見えないところで，どのような動きをしているのか学生自身が感覚をつかみ，手技を獲得していく必要がある．そのため技術を獲得するための支援として，実際に学生の手を取り，力加減や微妙な手加減，手指の動きの指導を期待している．

ま と め

看護学校では看護の基礎を学ぶだけでなく，自律した専門職業人となるための支援も必要である．また，助産学校では短い期間のなかで，多くの知識だ

けでなく技術も習得しなければならないため，効率よく学ぶことができる支援が必要である．看護学校，助産学校ともに共通していえることとして，学生は限られた学習期間のなかで，多くのことを学び成長したいと考えていることである．だからこそ，学生の成長の可能性を信じ，学ぶ機会を最大限提供してほしいと考える．学習支援を提供する側，つまり看護学校，助産学校，臨床に学生の成長を信じてもらい，学ぶ機会を提供してもらうことで，より学習への意識が高まり，積極的に学ぶことができる．また，支援を受ける学生には個人差がある．支援する側で，学生はここまでできればよいと基準を決めるのではなく，支援する中で学生個々の持つ力を把握し，学生がその時点よりさらに一段階上の学習ができるような支援を学習者は期待している（図１）．

［文献］

1）マルカム・ノールズ（堀薫夫，三輪建二監訳）．成人教育の現代的実践 - ペタゴジーからアンドラゴジーへ．初版．東京：鳳書房；2002：p40.